



獅子頭 (伊奈富神社所蔵)



会報「榊葉」第 9 号  
昭和58年 7 月12日 発行  
発行者 富 永 主 税  
編集 広 報 委 員 会  
発行所 津市島居町  
三重県神社庁内  
三重県神道青年会

人心の荒廃に歯止めを

会長 富 永 主 税

会員諸兄と共に国家皇室の弥栄を祈念し、日頃の神明のご奉仕を通じて斯界昂揚のためご尽瘁のこととお慶び申し上げます。

本年度総会におきまして、役員の改選がおこなわれ、再度本会会長の重責を荷うこととなり、新執行部による新体制のもと、本年度の諸事業活動を推し進めたく、更に会員はじめ関係各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。

先の任期にて会運営の充実と会員意識の昂揚とを重きに置き、各委員会の設置（復活）が出来得て、会費納入率が完納に近い数に達したこと、

また、神宮大麻頒布促進活動・ブロック会・お宮の子供会等の諸活動も会員諸兄の自覚と協力により多大の成果が得られましたので、更に各委員会との連携を密にし充実をはかりたく思っております。

本年度も、もとより神宮お膝元県として姿勢を正して、神宮御奉賛啓蒙運動の展開および神宮大麻頒布促進の支援活動および神社振興対策指定神社の支援活動の三活動に、国民

精神昂揚運動の実践をふまえた活動を展開して行くべく準備を進めております。

また、「青少年の教化育成」を柱とした、お宮の子供会の開催は第八回を数え、神青協本部会報にも先に掲載せられ、他県神青会事業にも劣らぬ本会特異な活動の一つであるが、本年は津市結城神社境内をお借りして開催する計画を進めています。

また、永年の問題である神社の森の緑を守り育てて行くことは、単に本会の活動のみならず、人間としての人格形成の上から大切なことであり、急務だと考えています。

昨今、国土開発の波に洗われて各地の山や森も樹木が伐採されていく中、鎮守の森の大切さは言うにおよばず、水害などによる自然の荒廃とともに人心の荒廃を憂うものであり、せめて自然の荒廃・人心の荒廃に歯止めをかけ、前向きに積極的に行動する青年神職でありたく、諸兄の御協力をあおぎ御挨拶いたします。

(志氏神社宮司)

## 昭和五十七年度

## 神青協中央研修会報告

森 俊 嗣

昭和五十七年度神青協中央研修会  
が、去る二月二十一日・二十二日の  
二日間、神社本庁中央研修所の共催  
を得て、伊勢市の神宮会館にて開催  
された。

今回は、昨年北海道での研修でも  
つて各地区を一巡した為、研修の原  
点にかえる意味で、神宮のお膝もと  
で開催され、主題「祭祀の本義」の  
もとに全国から約二百名余りの会員  
が集まり研修が行なわれた。

第一日は、幡掛正浩先生に「日  
本の文化伝統と祭祀」について基調  
講演を承り、続いて、討論会「宮中  
祭祀―大嘗祭をめぐる諸問題」に移  
り、先ず、倉林正次先生より「日本  
のまつりの集大成」について、鎌田  
純一先生より「大嘗祭の本義」につ  
いて、更に洪川謙一先生より「新憲  
法下の皇室祭祀」についてのご提言  
をいただいた後、活発な討論が行な  
われた。そして、その後の座談会は、  
「神宮式年遷宮について」のテーマ  
でブロック別にわかれて行なわれた。  
第二日は、早朝より五十鈴川に



て禊行事があり、その後、分科会と  
全体会議が行なわれて、二日間にわ  
たる研修会を無事終了した。

なお、今回、分科会で行なわれた  
テーマが大きくかつ深いため、諸先  
生方への質疑という形となったのは  
止むを得ないことであつた。しかし  
研修の原点にかえり、伊勢の地で禊  
行事も含め「祭祀の本義」という奥深い  
テーマで行なわれたのは、青年神職

に於いて、宮中祭祀はもとより、十  
年後にひかえた式年遷宮について神  
社界の今後の有り方を再認識する意  
味からも有意義であつたと言える。

(神宮出仕)

## 第一分科会報告

前川 栄 次

第一分科会では、長谷勝俊理事を  
座長に、鎌田純一先生を助言者に迎  
え「祭祀としての大嘗祭」について  
広く討論がかわされました。

大嘗祭の本意は、言うまでもなく  
昔より生活の根源である稲を、天照  
大御神と同殿に於いて相嘗する事に  
より、天皇霊・御魂を身につけ、天  
皇陛下としての御力を持ち、真の天  
皇陛下となられる天皇継承、日嗣の  
儀式であるのです。この大嘗祭を終  
え日本の国体を御守り頂くのです。

この大嘗祭の斎行に際しては、悠  
紀殿、主基殿をどこに造るか、又、  
悠紀田、主基田の卜定という重要な  
選定の問題があります。今上陛下の  
御即位の時には、国が一つとなり重  
大祭祀として、何の違和感もなく、  
滞る事なく大嘗祭は斎行されました。  
しかし、今現在の日本人の精神の  
上に於いては、とても難しい問題と  
なっています。その根底には、国民  
全体の天皇陛下、国体に対する意識

の低下があるからです。

悠紀殿・主基殿に於いての祭祀上  
の作法・次第については、誰も知る  
事なく、天皇陛下唯一人が知るのみ  
であります。この点に於いては、私  
達自身、事細やかに知るべき事では  
ないが、日嗣の儀式としての意は、  
広く国民に知らすべきであり、心を  
一つにするべきであります。とかく  
祭祀、祭典に関しては、神社界だけ  
の問題であるかのように考えられが  
ちであります。そうではなく、日  
本人全体の問題として考えるべきで  
あります。特に、この問題が中心に  
討論がかわされましたが、私達は今  
何をすべきか、それは、神道精神を  
取りもどすと共に、国体を守る事の  
重大性を広く国民に理解を求め意識  
付ける事です。勿論、殺気立  
てて運動する事も反響を与える事  
になりかねませんから、より認識を  
深めより最良の方向へと進むべく、  
努力することが大切であります。

(江島若宮八幡神社宮司)

## 第二分科会報告

辰 守 弘

「大嘗祭の法的諸問題」というテ  
ーマのもと、梅野副会長を座長に、  
神社本庁事務局長の洪川謙一先生を

助言者に迎えて行なわれた。

大嘗祭は、新帝が即位後始めて執  
り行なわれる最大最高の祭儀にして、  
それをなすため場合は半帝と称され  
た。天皇が天皇として行なわれられ  
る大嘗祭が、かかるような事なき様  
に、いかなる時世においても、滞  
事なく執り行なわれる事を念ずるは、  
神道人はもとより国民として当然で  
ある。然し、敗戦を機に憲法をはじ  
め日本の国がが大きく変革せられ、  
それが我々の願いの如く執行せられ  
るか否か、法的に問題ありや否やと、  
右のテーマで研修したのであつた。

驚くことに、新皇室典範には、  
「大嘗祭」執行の条、「祖宗の神器」  
継承に関する規定が省かれ、定めら  
れていないのである。又、登極令も  
廃止の憂き目にあっている。そこに  
問題がある。「即位の礼」は記され  
ている(24条)が、大嘗祭に関して  
は条文なく、大嘗祭の行なわれない  
新帝が生まれるのではという懸念は  
つきまとうのである。

もとより法理論では、成文法と不  
文法があり、この大嘗祭は慣習法で、  
悠久の不文法として存すると解する  
のが吾人の立場である。皇室の祭祀  
その他の重大事は、成文法としてで  
なく、「従前の例」不文法として生  
きており、大嘗祭は執行されると考  
えられる。只大嘗祭が、内廷の私事、

天皇の私的行為として執行せられる  
のではなく、国としてなさねばならぬ  
憲法上の民族的義務であるとして、  
国事もしくは公事として執り行なわ  
れるように我々は務めなければなら  
ない。大嘗祭が国事私事との決定は  
時の政府に委ねられる。それ故、世  
論をしてしるべく斎行せられるよう  
に、神社人は、氏子崇敬者の心を  
しっかりとつかんでおく事が肝要であ  
るとの結論を得たのであつた。

(多度神社権禰宣)

## 第三分科会報告

宇佐見 登 正

第三分科会では、中央研修会の二日  
目にあたり「神宮式年遷宮」につい  
て取り上げ、約一時間の話し合いが  
なされた。座長は大野二良理事、助  
言者は古川真澄先生であつた。

その内容は、まず古川先生より式  
年遷宮の歴史的な沿革、特に御師の  
活動の延長線上に現在の奉賛活動が  
有る事を話され、地方の隅々の人々  
にまで、国のあるべき姿(神宮式年  
遷宮)の方に顔を向けさせる事が大  
切であると力説された。そして、第  
六十一回式年遷宮の御用材の見込み  
は付いたが、御神宝類を調製する職  
人さんたちの気持が、だんだんと

変わってきていると述べられた。

この後、参加者の中から次のよう  
な質問が出された。不況が長びく事  
に依り募財献金が困難になるのでは  
ないか、という経済的な不安。又、  
神に対する畏敬の念が薄れた、戦後  
の人々が多くをしめるという精神的  
な不安。この二つの問題が、次回御  
遷宮に及ぼす影響はどのようなもの  
だろうか。又、それに対してどう対  
処すべきかが問われた。

これに対して、和田年弥参与は、  
神宮内部では、現在、遷宮募財を集  
めていると述べ、精神的自己研鑽と  
しての内部テキスト「式年遷宮問答  
集」を作製中であり、神宮の中の幹  
部の人々が講演したものを活字にし  
ようという企画も現在持っている、と、  
次回御遷宮に対する意気込みを披露  
された。

又、大野氏は、このような時代に  
おける対処の仕方として、世代交替  
に伴い、教化活動を行う神社界の者  
が、より一層式年遷宮の趣旨を知る事  
が急務であり、それがなされて始め  
て氏子の方に、神宮の事を知ってい  
ただくことができる。と述べられた。  
以上、簡単に経過報告を記したが、  
私は、神宮職員として、十年後の式  
年遷宮が無事斎行されるように努力  
したいと思う。

(神宮出仕)

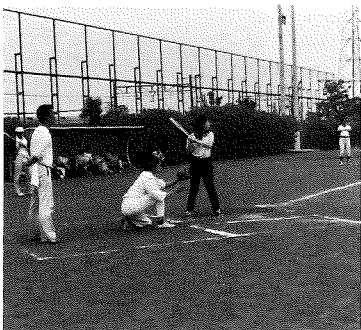
新入会員歓迎  
ソフトボール大会

新会員 飯 沼 喜 規

去る五月三十日、津北部グランド  
で、神青新入会員歓迎ソフトボール  
大会が行なわれました。

本年度より各神社に奉仕すること  
になった、新任神職の顔合わせの場に、  
私も参加させていただき、大変うれ  
しく感じるとともに、これから神社  
界を背負う人たちの、新たな意気込  
みを感じられました。まだ何も知ら  
ない私達にとっては、先輩の神職さ  
ん方から、色々な意見を聞くことが  
でき、有意義な一日を過ごすことが  
できました。私も一神職として頑張  
りたいと思います。

なお、大会の結果は、中勢地区が  
優勝致しました。(多度神社出仕)



## ブロック会について

馬場 明徳

ブロック会の発案者として広報委員長より原稿依頼を受け、ここにブロック会の意義を書かせていただきます。

不断御仕事が忙しくて神青会活動に参加いただけない方も気軽に参加いただけるように、ブロック内の会員神社をお借りして、身近な問題をテーマに膝をまじえて話し合い、その話し合いの中から何かをつかみ、会の発展につながればと考える次第です。将来は、ブロック同志で交換会をもつてもおもしろいのではないかと考えます。会合は二ヶ月か三ヶ月に一回ぐらい開催し、会の運営等はブロック理事におまかせし、ブロックの特色をいかして限られた時間を有意義に過していただきたい。

私の所属する北勢ブロックでは、第一回目のテーマに地鎮祭を採り上げ、二回目に、人生儀礼と授与品ということで開催をしたのですが、この一回目の地鎮祭では、同じブロック内、支部内でも個人差がありましたが、雑祭式であるので当然でありましたが、あまり差がないようにお互に勉強し、今後進みたいものです。

会員諸君、ブロック会に参加し、勉強しましょう。  
(三重県神社庁主事)

## 北勢ブロック会 報告

山本 行 恭

第二回北勢ブロック会は、去る五月十八日桑名市春日神社で、二十余名の出席を得て「人生儀礼と授与品」のテーマで開催された。

動もすれば怠りがちな通過儀礼を広く氏子に普及し、その重要性を識っていたく事は勿論、我々も意義を充分に説明出来るだけの姿勢は必要。幼少期・厄年等は「かぞえ」で行なうという古来からの風習を忘れてはならない。又、各神社の教化方法や実態等活発に発言された。撤下授与品は各神社多少違つてはいるものの、独特な由緒有るもの、或いは、特殊な作法でお祓いをされる社もあり一同の耳を集めた。

扱、何はともあれ、参加者全員が意欲的に発言をし討議がなされ、打ちとけたムードの中で会合出来たことは何よりの収穫であった。

皆様方の御協力に多謝多謝多謝！  
(椿大神社権禰宜)

## 中勢（伊賀）ブロック会報告

山中 理

第一回中勢ブロック会を、三月十二日(土)午後七時より、三重県神社庁に於て開催致しました。

我々神職がご奉仕する雑祭のうち最も重要且つ難しいお祭「神葬祭」をテーマに採り上げ、宮崎至功君が座長となり、座談会形式で研究会が行なわれました。地鎮祭がそうであるように、神葬祭も地域により形態が異なるところがあり、ほとんどのところが略式で奉仕されていて、正式に御奉仕されるところが少ない(正式な神葬祭の次第・作法を充分に心得ていないのが現実)という現状です。神道における「死生観」をもう一度考え直す必要があると出席者全員痛感して幕を閉じました。

出席率が非常に悪かったので次回には多数の出席をお願いします。

○次回中勢ブロック会開催予定

期 日 七月中旬頃  
場 所 三重県神社庁  
テ ー マ 「神道における死生観」  
― 神葬祭奉仕の心得 ―

内容は、原副会長にご講演をしていただき、その後座談会を行います。  
(野邊野神社権禰宜)

## 南勢（南紀）ブロック会報告

川口 浩之

三重県神道青年会においては、本年度の活動方針の一つとして、お宮の杜を守るべく「緑化推進」を掲げているが、南勢・南紀ブロックにあつては、この「緑化推進」の持つ意義についてアプローチを試みたのである。

緑、すなわち植物が持つ科学的な価値については今更に述べるまでもないが、会合に於いてはこの問題について、予てから論究されている。神宮に奉仕されている神青会員小堀邦夫氏にパネラーを依頼し、学習を進めた。同氏は、「エントロピーの法則」を引用され、緑の大切さを力説された。すなわち、一度破壊されたものはなか／＼元には戻らないということであり、「緑化推進運動」が単なる植樹の運動であつてはいけないということとを再認識できたように思う。つまりは、無秩序な開発、即ち、人工化というものへの警鐘にしなければいけないということであり更に、突き進めて考えれば、神道の根源に関わつて来る大きな問題のよ

うな気がするのである。  
(猿田彦神社権禰宜)

## 寄稿

## 奉護

原 光 夫

昨年九月、兼務神社の社殿が炎上した。子供の火遊びが原因である。約二十坪の拝殿及び渡り廊下は、十七・八分で焼けてしまった。本務神社で連絡を受けた小職が駆けつけた時には、未だ本殿に火の手は上がっていないかった。必死で御神体を社務所まで御動座申し上げ御無事であつた。御本殿は鉄筋コンクリート造りであつた為、幸い御扉を焦がす程度で済んだ。

多くの知人の方々よりお見舞いや激励を頂き、非常に有難度く厚くお礼を申し上げます。

今更乍ら思つてみても惶ましい限りである。役員総代と一夜を明かし今後のことについて色々話し合った。総代の内に大工、指物屋、板金屋があり、氏子総出で取り敢えずの御仮殿を造つて、そこに御神体をお遷し

## 今、ふと思ひつゝ

熊谷 泰

今更、びっくりする事もない筈だが、全国の公中学校では昨年、七校

に一校の割で、又、高校では、十校に一校の割で校内暴力が起つているそうで、千八百八十八人も教師が、情ない事に生徒の暴力に泣いているなどと、或る新聞には記載されていました。

私事で申し訳ないが、現在私には二人の小学生がいるけれど、自分の子供だけは決して非行などに走るはずがないと思つても、いささか不安になつてくる。

無論、教育者たる教師が、もっとしっかりする事こそ肝要な事ではあるが、家庭に於ける教育程大切なものはないと思われまふ。

私たち、神道青年会諸兄の中には、そろそろ自分の子供の非行について、少々気になる年齢に達している方も多いと思われるが、子供にとつては親は鏡、夜のお酒の付き合ひも必要とは思われるが、やっぱり、子供たちとの会話をいつも絶やさず、子供の気持ちちが分かる親になりたいものである。

何故、私がこんな気持ちになつたかというと、五年前に親父を、そして本年母親を亡くして、始めて親の尊さ、有難さが本当に理解出来、親というものの存在を真に知り得たからかもしれません。

出来の悪い我が子を見て、毎日叱つてばかりいるよりも、親である自

分を見つめ直し、修練する事が肝心なのです。

NHKテレビの朝の人気番組「おしん」ではないけれど、小さいながら、あれ程しっかりとした考えを持ち続け、親を思い、兄弟を思う姿はブラウン管を通じてもやっぱり、胸にせまるところがあるし、現在の自分が、むしろ恥ずかしくなる程です。氏子の皆さんを教化する立場の天下の神主さんが、こんな事では困つたもんだと思われてなりません。

家庭に於ける教育がしっかりとしていれば、決して校内暴力は起るはずがない。古くから伝わる日本の素晴らしい伝統の中にある、祖先を敬い、親を大切にすること、子供をしつかりとしつける道德の心こそ、神道の教えに他ならないと思います。

独身貴族の会員の方には、あんまりぴんと来ないお話だと思ひますし、又、立派な親父として毎日お勤め頂いております会員諸兄には、分かり切つた事を言うなとお叱りを受けそうですが、今一度、自分を見つめ直してみてください。

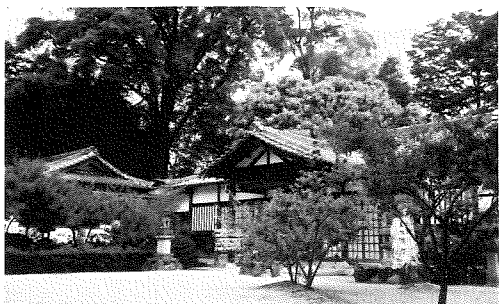
このままでは美しい日本の道德は減んでしまいます。今、私たちがしっかりとした考えをもって、子供たちに真の教育を教えていく事こそ大切なことです。

そうすれば、やがて私たちの考え

三重の神社巡り ④

野邊野神社

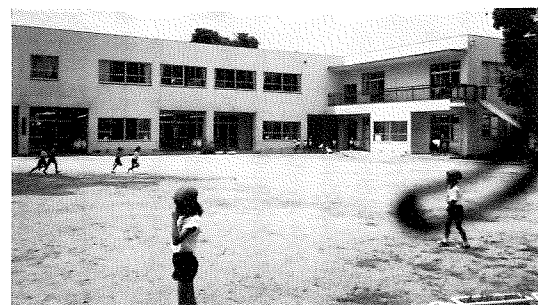
鎮座地 久居市二ノ町一、八五五番地  
御祭神 品陀和氣命 迦具土命  
神紋 左三ツ巴  
例祭 十月十一日  
建物 本殿神明造三坪、幣殿・拝殿三十坪、参集殿・社務所百坪、儀式殿四十坪  
境内地 一、九六一坪  
宝物 高通公御杖 刀剣  
氏子数 高通公御筆（御歌四首）  
宮司 高堅公御筆（富士之御絵）  
由緒 野邊野神社境内は、元八幡宮の境内で、この八幡宮（創立年代不詳）は、古記によると元鹿鳴村、（現在の久居市小戸木町）に鎮座されていたが、藤堂高通公（藤堂高虎公の孫）が御分封になり、寛文十年（一、六七〇）、久居に城を築かれた時御神勅により、八幡宮を大守の御氏神並びに久居中の守護神としてあがめられ、御殿より丑寅の方位（鬼門除け）にあたる現在の地へ御遷座



野邊野神社社頭

された。  
久居の総守護神・久居藩（五三、〇〇石）の祈願所として代々崇敬の念厚く、祭礼等は藩を挙げて盛大に斎行され、奉納相撲などは江戸より力士を招き、又、藩士や町人の力自慢も相撲に加わり、特に賑やかに行なわれたようである。又、八幡宮の大鳥居は有名で、高さ一丈五尺、幅三丈（高四・五米、幅九米）もあり

藩の崇敬の厚さがうかがえる。  
明治になり廃藩後も、毎年一月一日に久居藤堂家、一月二日には津藤堂家より幣帛が奉られた。  
合祀令により明治四十一年、愛宕神社（御祭神迦具土命）、久居神社（御祭神・藩祖藤堂高通公）外二十一社を八幡宮に合祀し、久居開府以前はこの土地一帯を野邊（のんべ）といったので、旧名に因み野邊野神社と尊称したものである。  
久居は、「久しく住まい 居る安住の地」というのがその名の由来（藩祖高通公が命名）で、久居の総守護神である野邊野神社は、「安住の神」として、土地・家屋の守護、家内安全、商売繁昌、八方除災、開運、開拓等の御靈験あらたかで、広大無辺なる御神徳のもと広くご崇敬をいただき、又、久居の鎮守さまとして市民に親しまれている。  
境内社  
野邊野天満宮  
御祭神 菅原道真公  
野邊野稲荷神社  
御祭神 倉稲魂命  
壽命神社  
御祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命  
久居英霊殿  
御祭神 久居の御英霊



のべ幼稚園

教化事業

野邊野神社の教化団体として敬神婦人会（八千代会）と幼稚園（学校法人のべ幼稚園）があり、幼稚園は、神道的情操教育の実践の為昭和四十五年に創立し、現在園児定数二四〇名の園に発展しており、園児はもとより、家族ぐるみの教化につとめている。  
その他の団体として、八幡講、獅子舞保存会等の活動が活発に行なわれ、現在氏子青年会、神社スカウトの育成につとめている。

を受け継いだ子供たちが、明るく、豊かな未来を築き上げていってくれることでしょう。  
そうです。青年神職よ、もつとしっかり世の中を見つめ、今こそ前進しようではありませんか。  
最後になりましたが、本年図らずも名誉ある三重県神道青年会副会長という大役を仰せつかり、いささか困惑しております昨今ではありませんが、富永会長を助け、歴代副会長の名を継ぐ事なく、力一杯、頑張る覚悟でありますので、何卒、会員諸兄の温いお力添えを宜しくお願い申し上げます。  
（神宮宮掌）

祈る、信仰する、ということ

尾間 時弘

此の度、神青神葉の原稿を依頼されました、困った挙句、頭に浮かぶまま、日々の雑感をまとめてみる事に致しました。前後の脈絡等不明瞭な点も多々あると思いますが、御容赦いただきたいと思ひます。

御存じの様に、一口に祈る・信仰すると言っても、我々の社会には神道・仏教・耶蘇教等多種多様の宗教

が存し、その一つの宗教だけを信仰している人もいれば、人生儀礼として、生後百十日・百二十日に氏神さんにて初宮詣、さらに七五三詣を行い、成人して後は教会にて結婚式を行い、子供の将来が健康であれ、二人の人生に幸あれと心より祈っている人もいます。  
こう言いましたら、神道と耶蘇教等とは教義面は勿論の事、その形態も伝播の範囲も別ではないか。一齋に考えるのはどうかと言われる方もみえると思いますが。私はここで信仰を、その人内部の一筋の祈りとしていかなる宗教でも同じではないかと考えるわけです。

では人はどうして祈るのか、わかりきった事ですが、先程申しました様に、無意識裡に祈っている人もいるでしょうし。又、やむを得ずそうせずにはおれない場合、所謂、突然の危険に際し、病氣等にみまわれた時に現世利己的なものを求めるために祈る人もいます。又、道徳的価値観の低下が叫ばれる現代社会の平凡な日常生活の中で、些末事の累積による虚無感等により祈らずにおれなくなるという人もいます。う。無論、これらはほんの一例でしょうし、その信仰に入る動機は、人それぞれ千差万別でありましようが。

その祈る姿の奥底には飾りを捨てた誠の心・本然の姿が存すると思ひます。

神道においては御神前に玉串を捧げます。家族の健康を願ひ、諸々のお願ひをする姿には誠があり、人間の自ずからなる心のままに神様に委ねようとする姿があります。

そして、人間の自ずからなる心とは、神道という神代より連綿と受け継がれてきた惟神道であり、唯一筋に拝礼する姿、誠の心を持つとは、自己を今日生かしているあらゆるものの、親・師・伴侶・兄弟・朋友等から自然の生きとし生ける全てのものに対して、感謝の気持ちを持つ事に通じているのではないのでしょうか。

この様に考えますと、神明奉仕は言わずもがな、日々の祭を通し、参拝者の誠のままに拝礼する真摯な態度に接して、さらに仲執り持ちとしての自覚のもと、より以上研鑽努力をしていかなければならないと覚悟する次第です。

（洲崎浜宮神明神社権禰宜）

料理の大家から聞いた神明奉仕の心得

川口 浩之

ある料理の大家に聞いた話であり

ますが、料理の基本は包丁にあるというであります。材料に応じて、それに最も相応しい包丁を選び、しかもその包丁を自由自在に扱えなくては一人前の板前とは言えないそうです。そこには自然と臨機応変なる態度が要求されてくるのであります。

次に、この板前氏は、「上手な板前も初心者の板前も手を切ることは無い。手を切るの、中途な板前だ」と語った。不思議に思つて尋ねると、一流の板前も初心者も俎に全身全霊を注ぐからケガをしない、中途に鼻唄まじりにやるとネタを切らず指を切ると教えてくれました。これは初心を忘れるなど言うことです。

さて、神明に奉仕する私たちは、崇敬者の切実なる願ひ事を神様に仲執り持つ責務があります。

崇敬者の方々のお願ひ事は千差万別であります。そこに臨機応変なる態度が要求されてくるのであります。また、御神前に奉仕するものは一寸のミスも許されないのであります。常に初心を忘れない敬虔な態度が要求されてくるのであります。

（猿田彦神社権禰宜）

先輩の矢野さん

「魚の文化史」を記す

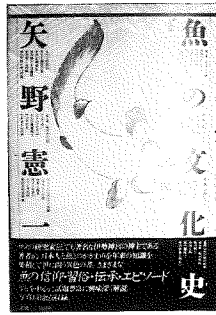


われわれの先輩である、神宮権禰宜矢野憲一氏が、このたび『魚の文化史』というユニークな本を講談社から出版された。

矢野氏は神宮の神職として奉仕の寸暇をさいての研究や執筆であり、一冊の本をまとめるにも数年がかり。しかし、神主であるから他の研究家と視点を全然異にする特色をもっておられる。

今度の本は五冊目で、先の『魚の民俗』について魚類と人間の深いかわりを記す。

御神酒と魚がなければ祭りにならないという。日本人の食の初め儀式にも、オモチと魚が必要であり、西洋の文化が肉食文化であれば、日本のそれは米食文化とこれまでいわれてきた。しかし、日本の食文化は米プラス魚の文化であると、矢野氏は強調され、これまでの文化史は稲が主流で魚は忘れられてきたという。



この点を、魚博士で有名な末広恭雄氏は、推薦の言葉で「面白い本であるばかりか、魚の文化史という新しい研究ジャンルを切り開いた得難い本である」とし、樋口清之氏も「魚の信仰・呪術・民俗など意表をつく問題を提起し、類書のない楽しい書物である」と記す。

内容は、「初穂と初尾」「伊勢神宮とアワビ」「神饌の魚」など、われわれ神職にとつても関心がある話が多し。

どっさり。楽しく読んでいただくと、自分でも楽しみなが執筆したと矢野氏はあとがきで記しておられるように、実に面白く読める本である。講談社発行。定価千五百円。

お知らせ板

◎第八回 お宮の子供会

期日 八月三日四日五日

(二泊三日)

場所 結城神社(津市)

◎東海五県神青協連絡協議会

並びに教化研修会

期日 九月八日九日

場所 岐阜県高山市

※会員の参加をお願いします。

表紙写真説明

獅子頭

鈴鹿市稲生町鎮座

伊奈富神社所蔵

当神社は鈴鹿市の南部に鎮座し、御祭神に保食神をお祀りする延喜式内社である。創祀は崇神天皇五年と伝え、貞観七年従四位下に昇叙した国史現在社でもあり、更に文永十一年には正一位に昇っている。

当神社には、扁額、神像、三足壺等の指定文化財を有し、ここに紹介する獅子頭もそのひとつである。高さ二二樞、幅二六樞、奥行三一樞と現在の獅子頭に比べて比較的小さく檜材で作られている。眉、眼、鼻、髭、は黒漆塗り、他は朱漆塗りである。頭頂部胎内には、「弘安三庚辰正月稲生三大神」と墨書され、法隆寺面の系統を引く整った作風のものである。

この獅子頭が現存していることから、鎌倉時代には既に獅子舞が行われていたと思われる、伝統の古さを物語っている。獅子舞は三年に一度、即ち、丑辰未戌の年の二月七日より四月十六日まで、稲生町内各地区で勇壮な舞が行われている。

(宮司 吉田義隆)

会員ニュース

昭和五十七年

○五月三十日 川俣神社禰宜中村嘉

考君結婚。新婦真由美さん。

昭和五十八年

○五月八日 神宮出仕河合真如君次

女誕生。摩沙美ちゃん。

○六月七日 野邊神社禰宜山中理

君長女誕生。亜希子ちゃん。

○六月十一日 豊地神社宮司宮村和

男君結婚。新婦文子さん。

編・集・後・記

ここに、昭和五十八年度役員改選に伴う、新しい広報委員が発足して最初の榊葉九号をお届け致します。

本号から、前号迄編集の担当をしていた吉田理事のあとを受け、その重責を担当させていただくことになりました。なにぶん初めてのことで、不備な点が多いかと思いますが、皆様方の御指導、御協力を宜しくお願い申し上げます。

榊葉は我々会員の会報です。会員のコミュニケーションをはかる為の会報として、更に誌面の充実に一層の努力をしたいと思っておりますので、会員諸兄の積極的な投稿をお願い致します。

(館)